

観光と食文化

六 北・山辺の道

「山の辺の道」は、日本最古の官道である。それは桜井市の三輪山麓に発し、天理市の石上神宮を経て、奈良市の春日大社、東大寺に通ずる古道である。沿道には数々の由緒ある神社や仏閣、壮大な古代の陵墓や官跡などの史跡が点在する。まさに日本の古代王朝発祥の地を南北に貫く小径である。日本書記の巻一六に載せる歌に、その小径のいにしえの面影を垣間見ることができる。「石の上、布留を過ぎて、こも枕、高橋過ぎ、物さには、大宅過ぎ、春日、春日を過ぎ、妻こもる、小佐保を過ぎ、玉笥には、飯さへ盛り、玉もひに、水さへ盛り、泣きそほち行くも、影媛あはれ」

二月上旬のある日の昼下がり、「山の辺の道」の北半分をそぞろ歩いて見ようと思った。最初は近鉄奈良駅から歩く予定だったが、時計を見ると時間的な余裕がなさそうなので、予定を変更してバスに乗り、天理街道の下山というバス停で下車。ここから本格的な散策が始まる。時刻は午後二時半過ぎで、早春の青空に片々たる白雲が流れ爽やかな日和だ。東には若草山、春日山、高円山、菩提山、竜王山、

* 大 村 喬 一
堤 博 美

卷向山、三輪山のなだらかな笠置山脈が続き、振り返れば、西に生駒平群、二上、葛城、金剛の山並みが見遠かされる。まさに「たたなづく青垣山隠れる大和しうるはし」と実感する。その国中の景色を眺めながら二十分ばかり東へ進むと、円照寺前バス停に着いた。手入れの行き届いた参道の両側に松や楓に混じって桜樹が沢山植えられている。これから一月半程後の春の盛りには、見事な桜花が爛漫と咲き匂うことだろう。だが今はまだ裸の枝々に漸く固い蕾が芽生えかけたばかりだ。その参道の半ば辺りの右手に池があり、その少し先に高さ一メートル程の長方形の石碑が建っていた。その表に万葉集の歌が一首、陰刻されている。

あしひきの山行きしかば山人のわれに得しめし山つとぞ此れ

この歌は、元明天皇がこの地に行幸された折りに詠まれたものだが、歌碑は平成十年十二月に建てられた旨が裏に記されている。近年建立された万葉歌碑の一つだ。そこからさらに二丁程奥に進むと、

鬱蒼とした木立の中に旧門跡寺院、円照寺、別名「山村御殿」がある。ここは第一〇八代後水尾天皇の第一皇女、文智内親王（御幼名梅宮）が創建された尼寺で、奈良の三門跡寺院の一つに数えられ、内部は今も一般には公開されていない。黒木の門を抜けてさらに三十メートル程先に、左にくぐり戸のある薬医門造り風の立派な山門がある。それをくぐると、玉砂利を敷き詰めた奥長の前庭に長方形の飛石が一直線に内玄関まで敷設されている。正面に唐破風瓦葺きの瀟洒な宸殿があり、その右手に、昔風の茅葺きの本堂「円通殿」がある。左手は薄黄色の長い筋塀が続き、その上に冬枯れの木立が大小の枝々を扇子の骨のように青空に広げている。山門左手の黒木の通用門の奥にも植え込みの間に、幾つかの白壁の建物が垣間見える。辺りは誠に森閑として、物音一つしない幽邃のただずまいだ。山門の下にしばし佇んでいるだけでも、心が洗われるような閑雅な気持ちになる。精神修行の場所はやはりこうした世俗を超越した環境でなくてはならない。しみじみとそう感じた。

円照寺の参道を少し引き返して、黒木門を出てすぐ左手に大師堂の榜示がある。その細い石段を登り、雑木と竹林の中の細道を南に一丁程下ると、稻荷明神の小さな石鳥居があり、それをくぐり抜けると、幅五メートル程の舗装道路に出た。道路に面して四角い大きな池が満々と水を湛えている。竜王池と言ひ、池の南側に榎木の植栽された小さな出崎の島があり、その突端に朱色の鳥居のある小さな社が鎮座している。池の周囲がコンクリートで護岸工事されているのが何とも

味気無い。東に向かつてそぞろ歩く。所々工事中の資材が道端に転がっている。しばらく進むと、右手の路傍に「五ツ塚」の標示板が立てられていた。道路沿いに一定の間隔で、円墳や方墳らしき塚が並んでいる。六、七世紀にこの地に住んでいた豪族達の墳墓らしいが、所々道路の造成で削りとられている。痛ましくも無慚の限りだ。

竜王池から五丁程東に「もう谷池」という池があるように地図に出ているが、既に一キロ程歩いたと思うのに、それらしき池が見当たらない。先に進むべきか、あるいは引き返すべきか逡巡していると、後方から老夫婦らしき品のいいカップルがやって来た。我々が山の辺の道を天理方面へ行きたいのだと言うと、還暦過ぎとおぼしき野球帽を被った旦那が、真つすぐに進むように促す。いささかためらいを感じたが、我々も二人について歩き始めた。二人は散歩がてら正暦寺にお参りするのだそう。道々歩きながら、互いに言葉を交わす。突如、旦那が先行する私に低い声で尋ねた。

「失礼ですが、お二人は芸術家か、あるいは大学教授ではないですか」

「えっ？」と自分は驚きの声を上げ、「どうしてですか」と思わず反問した。

「いや先程、私らが道端に車を停めて着替えをしていた時に、お二人が通りがかりに私らに挨拶をされたでしょう。その後で女房が、あなたの方のことを何か立派な人みたい。偉い芸術家か高名な大学教授ではないかしらと、私に言うんですよ」

「へえー」と私はまたも嘆息を漏らした。それから後ろを振り返り、小柄ながら上品な顔立ちの夫人の方を見つめながら、単刀直入に尋ねた。

「奥さんは、占いか何かをなさるのですか」

「いいえ」と夫人は微笑みながら、顔の前で右手を左右に振り、少し間を置いてから、

「実は昔、あたくし商社に長く勤めておりまして、その間にいろいろと偉い人にお目にかかりましたものですから、それでお顔を拝見して：」

「はあ、なるほど：それにしても、奥さんはお目が高い。私ほともかく、こちらの紳士は立派な方ですよ。私は言わばこの方の秘書というか、荷物持ちのようなものです」

「いやいや、あなたも普通の人には見えませんよ。芸術家か何かでしょう」

「とんでもない。そんな高級なものじゃありませんよ。まあ、うだつの上からぬ名無しの風来坊とでもしておきましょう」

人のよさそうな半白の老人は、ハハハ：と相好を崩し、

「まあ、行きずりの間柄で、あまり立ち入ったことを聞くのは失礼ですから、これでやめましょう」と老人。顔は日焼けして皺があるが、昔はなかなかの好男子ではなかったかと思われる。それから四方山話をしながら歩く。

途中で道が二手に分岐する。右は舗装道路が続くが、この先行き止

まりの札が立っている。左は狭い山道で、次第に上り坂になる。道端の小笹の中に落ちていた長い枯れた竹を二つに折って、杖代わりにする。やがて道が極度に狭くなり、勾配も急になった。足元が危なく、縦に一人ずつしか歩けない。それから互いに話すのをやめ、老夫婦が先頭にして、黙々と艱路を登る。背中にやや汗ばむ。大村先生のマフラーを自分のリュックに入れる。先生はベージュのコートを脱いで、左腕に抱える。こうして凡そ十五分ほど登ると、漸く上り道が終わりに下りになる。急勾配に足をすべらせぬように、用心しながら降りる。かくして十分ほど紆余曲折しながら下ると、やや広い舗装道路に出た。道路の横を小さな川が流れている。そこで四人がしばし立ち止まり、互いに安堵の吐息をもらす。山陰の冷気が心地よい。私はふと目指す方角が気になり、

「弘仁寺はどちらの方角ですか」と老人に尋ねた。

「この道をまっすぐ下ると、柳茶屋という所に出ます。そこを左に行けばすぐです」

時計を見ると、既に三時半を回っている。大村先生と顔を見合わせた。

「それじゃ、これで私達は失礼します」と私が言う、

「あと二百メートルほどで正暦寺ですよ。せっかくここまで一緒に来られたのだから、ちよつとご覧になってから行かれては」と老人が誘う。

「私達はまだこれから天理まで歩かなくてはなりません。ですから

残念ですが、正暦寺は今回は省略します」

すると夫人が自分の方を見て、思わず微笑した。「しよりりやくじ」を「しよりりやくする」と言ったのを、しゃれと取ったらしい。自分も笑顔で応じ、

「どうも親切に、ご案内していただきありがとうございます」

お辞儀かたがた丁寧にお礼を言い、いささかの心残りを抱きながら、好人物の夫婦と別れた。菩提山川を左手に舗装道路を西に下る。路傍の所々に豪壮な農家が散見する。また高級な外車の駐車する車庫をもつ屋敷もある。山里の豪農だろうか。途中右手に椿本神社を拝して歩くこと凡そ半時間、四時過ぎに柳茶屋に出る。三差路の道路脇に電話ボックスがあった。

「大村先生、前以て寿司屋に電話して予約しておいた方がいいのではありませんか。これから先は山道で、もう電話がないかもしれませんから」

「そうだね」と先生も同意。手帳を出して電話番号を先生に知らせる。五時から予約が二十人ちかく入っているが、七時過ぎ頃なら二人分は空いているでしょうとのこと。やはり予め電話して正解だった。これで先ずは一安心。

大村先生はそこで休憩がてらの煙草を一服。ガイド地図に載っている時計台を目で捜すが、辺りには見当たらない。再び歩き始めると、左手に農協のスーパー、南部公民館の精華分館が並び、それと反対側にマッチ箱のような小さな店がある。入口の立看板にコーヒー、タコ

焼き、うどんと書いている。ドアを開けて中に入る。小さなテーブルが四つ。店主は中年の婦人。客は他に男三人。コーヒーを注文し、先客達と山の辺の道について言葉を交わす。

「案内図に時計台と書いてあるのですが、どこにあるのですか」と尋ねると、

「あれは高さが二メートルほどのもので、よく見過ごされやすいのです。特に正暦寺の方面から降りてきた人には分かりにくい。下から上がってくる場合は、比較的に目につき易いのですがね」と隣の座席の歯並びの悪い中年の男性が説明する。

「僕は四国の安芸市にある灯台のような時計台を想像していたものですから」

女店主も笑いながら、

「皆さん、期待はずれをなさる方が多いようです」

地図の分かりにくいこと、その不正確さのために随分遠回りをしたことなどを、私がこぼすと、別の若い男の客が見せてくれと言うので、「てくてくまっぶ」を手渡す。それを機に客同士の間で雑談が始まった。私達以外の三人は土地の人らしい。大村先生が陶器の皿とコーヒーカップを見て陶芸の事に触れると、店主の婦人がすかさず、

「ここにも窯元がありますよ。清澄焼と言っています、この一帯が昔から清澄の里と呼ばれておりますので。このコーヒーカップは信楽焼ですが、他の湯呑や茶碗は皆清澄焼なんですよ」と説明する。それを契機に今度は陶芸談義がひとくさり展開した。大村先生はコーヒーが

飲めてご機嫌。それに煙草もうまそうだ。三十分程休憩して、四時半出発。

喫茶店から三丁程南下すると、古めかしい火の見櫓があり、その手前の徒歩道を右に入る。小川を越えて少し進み石段の坂道を登ると、標高一八三メートルの虚空蔵山の南半腹に建つ弘仁寺。山門の入り口に志納箱が置かれている。その中に入山料一人二百円を投函して、奥に細長い境内に入る。境内の中央に丈の高い石灯籠が置かれ、その右手の石段を上ると、杉木立を背後に重層四柱造の本堂が立つ。本尊は虚空蔵菩薩。弘仁五年（八一四）京都から高野山に向かう途中、弘法大師がこの山に明星の落ちるのを見て、明星天子の本地仏である虚空蔵菩薩をここに安置したという言い伝えがある。賽銭箱に小銭を喜捨して合掌拝礼。外陣に掲げられた虎、牛、仁王、富士などの絵馬を見上げて鑑賞した後、本堂の東側にある明星堂に安置する明星菩薩立像に礼拝し、諸病を払い除ける効験があるという「なで仏」の肩を手でなでた。ここは通称「高樋の虚空蔵さん」と呼ばれ、日本三大虚空像の一つで、少年少女達のいわゆる「十三参り」でも知られ、なかなか由緒ある古刹らしい。しかし今は参拝客は我々だけで、辺りは閑然として物音ひとつしない。

参拝後、境内を西に通り返けて、山門と反対側の裏参道の坂道を降りる。坂の下の左手に小さな池があり、その傍らに何故かパトカーが停めてあった。車の中には警官の姿はなかった。池の端で舗装道路に出て右折し、西に向かって歩む。右手は低い丘陵で雑木の間に茶畑や

竹林が並んで続く。六丁程ならかな坂道を下ると、左手に道路工事の中のブルドーザーが目に入った。その近くに立っていた若い警備員に、「シャープ研究所」に行く道を尋ねたが、まるで訳の分からない返事をする。地図を見せたが、一向に要領を得ない。仕方なく田畑の中の道を真つすぐに進む。左にゆるやかにカーブした方角に五丁程歩くと、一軒の家の前で洗車している青年がいた。地図を見せながら道を聞くと、間違いと判明し、また引き返す。ブルドーザーが造成していた場所まで戻り、丘陵の竹藪の手前、壊されかけた石垣のそばの小道を南に下る。ようやく前方にシャープの研究所が見える。地図とは違った大きな舗装道路に出る。しばらくすると左手に、大きな公園風の施設があり、「白川ダム」の標示板が遠くに見えた。右に「シャープ」の白い建物を見過ごして一丁余進み、三叉路を右に曲がり、さらに進むと、大きな陸橋道路の上に出る。これは車の往來の激しい名阪国道の上をまたぐ道路で、地図には載っていない。察するに、地図よりも新しく建設されたものだろう。しかしこの陸橋を走る車はほとんど見かけない。しばし橋上に佇んで茜色の西空を眺めると、折しも真つ赤な太陽が二上山の彼方に沈まんとしている。時刻は五時四十三分。漢詩の「夕陽限りなく好し、ただこれ黄昏に近し」を想起した。

素晴らしい日没を見納めてから陸橋を渡り、大將軍鏡池を左に見下ろして、すぐ先で左折。二つの巨大な配水タンクの間の小道に「東海道自然歩道」の標識柱が立っていた。これで間違いない、と安心。二丁ばかり進んで右に曲がる。雑木林の中の小径が二丁程続く。左右に

背の低い裸の柿の木が連なり、右手に中小の池が二つ、そして民家が四、五軒散在する。途中我々以外に全く人の気配がない。夕闇が迫り、外気の寒さが増す。さらに五丁程歩くと、二車線の道路に出た。路傍の家の壁に長方形の大きな看板が目についた。巨大なウナギの絵の中に「みしまや」の文字。大村先生が立ち止まって、「これは有名なウナギ屋ですよ。場所はどこかな」と住所を確かめる。それからまた歩き始める。夜の帳が降り、辺りはすっかり暗くなった。これでは明かりのない山道は歩けない。そこで豊日神社を廻るコースは省略し、天理教三十八号母屋の前を通り、信号を右折し、北大路を西に向かう。「よろづ病院」の南、所は三島町の一角に「みしまや」があった。大村先生が店に入り、マッチを貰ってくる。ウナギの味見は後日にまわし、今日の道達の締め括りとして念頭にあつた、お目当ての寿司屋へと、おもむろに足を向ける。

寿司屋は、天理駅前近くの某店。我々のヒイキの寿司屋だ。小さい店だが、清潔で、魚が新鮮で、いつも期待を裏切らない。ネタは毎日大阪の黒門市場で仕入れるそうで、今日もイキのいい寿司種がケースに並んでいる。何はさておき、先ず生ビールで渴ききった喉をうるおす。四時間以上も歩き続けて疲れ切った身体に、冷たいビールが心地よく滲みわたる。これぞ至福の時間である。頃合いを見計らったように、主人が声をかける。

「つまみにしますか、それとも握りますか」

我々の好みは、酒を呑みながら、握り鮓を味わうことである。寿司

の醍醐味は、ゴハンと魚の一体になった微妙な味を味わうことにあると考えるので、つまみにして魚だけを食べてしまうと、肝心を握り鮓の味が充分に鑑賞できなくなる惧れがある。

そこで早速握って貰うこととする。先ず中トロから口に入れる。新鮮なマグロを食べると、不思議なことに、何とも言えない香りが口にひろがる。この香りが食欲を刺激したのか、突然、猛烈に空腹であることに気づく。アジ、ヒラメ、イカ、赤貝、鳥貝、アワビ、ウニ（淡路島産の白、北海道産の黄色）、縁側、カツオ、サヨリ、アナゴ……

「ああ、うまい。本当にうまい」

「まったく、もう何とも形容できないですね」

手頃な間合いで出される握り鮓の絶妙な至味に、二人とも言葉を失い、専ら口唇を動かし、舌と喉の味覚に全身全霊を集中するばかりである。かくして立て続けにほお張り嚥下して、漸く心地がついたよくな気がする。少し腹も膨れてきたところで、ビールを止め、日本酒の爛徳利に切り替える。二人でさしつさされつしながら、今日の遊歩について振り返る。

「今日はどれだけ歩いたかしら」

「少なくとも、十二、三キロは歩いたでしょう」

「そんなものかね、僕にはもつと歩いたような気がするが」

「確かに回り道をしましたからね。正暦寺まで山越えしたし、それとブルドーザーが道路を造成していたところで行き過ぎて、引き返しましたから、あれで二、三キロは多めに歩いたことになるでしょう」

「時間的にはどうなの。都合四時間以上は歩いたでしょ」

「午後の二時半に歩き始めて、ここに着いたのが七時ですから、四時間半ですか。でも途中で立ち止まったり、コーヒープレイクで休憩しましたから、正味は三時間半ぐらいでしょう。まあ、山道が多かったから、平地を歩くのと違って、距離はあまり行っていないかもしれない。それにしても、あの地図は不正確ですね。先ず、もう谷池というのが分からなかった。それからシャープの研究所に行く道もはつきりしなかったし、名阪国道の下をくぐるというのは全く必要なかったですからね」

「そうそう、あれはもつとちゃんと改訂しなければいけないね」

「もつとも、道路工事が多すぎて、マップの改訂が追いつかないという事情もあるかもしれない。それにしても歴史的な風致地区の道路の造成は、行政が専門家とよく相談して検討してからにしてみたいいなあ。歴史的な景観も観光の重要な要素ですからね」

「全くだ。舗装道路ばかりでは、折角の山辺の道も台なしだ。古代の面影を残しておればこそ、歩いて歴史を体験する喜びが味わえるというものだ」

「同感です。景観はいわば観光の目玉なのだから、行政もその保存に尽力してもらいたいですね」

ここで杯を重ねて干し、おもむろに話頭を転ずる。正暦寺の途中まで同行した老夫婦が話柄にのぼる。

「あれは好人物の夫婦みたいですね。どちらも還暦を越しているよ

うに見受けましたが、いかにも仲がよさそうでした。夫唱婦隨を地でゆく、古き良き日本の夫婦の典型でしようか」

「さあ、それはどうかな。確かに人の良さそうな感じだったが、しかし外見では人間の中身は分からないからねえ」

「そうでしょうか。僕にはとても好い感じでしたが。風采と言い、物腰と言い、言葉付と言い、とても尋常一様の人物には見えませんがねえ。僕の判断は、吾が仏尊しと言う奴ですか」

「いや、そうじゃないよ。君の判断は多分正しいだろう、と僕も思うよ。しかし全面的にはねえ…人間というのは、長い間付き合ってみないと、中々解らないものだから、即断は禁物。それが僕の体験に基づく人間観だね」

「なるほど。言われてみれば、そうかも知れない。悪人よりも善人の方が却って怖い、と言う場合もありますからねえ。ところで、あの夫婦は我々を正暦寺に誘いましたよね。もしあれに同意していたら、どうなったでしょうか」

「さあ、どうだろう」

「おそろく、お寺を見た後で、一緒にお茶でもどうですかとか、あるいは、お酒を一献とか言い出して、ひよつとしたら、ここで四人で寿司をつまみながら、歓談していたかも知れませんよ」

「ふむ、それは面白いな。あの夫妻となら結構楽しく談柄を交わせたかも知れないね。寿司も美味しい、酒も美味しい、そしてあまつさえ、話も美味いときたら、これは大変なことですよ。そんな宴など滅多に

あるものじゃない。いや、そう思うと、惜しいことをしたなあ。折角だから、せめて正暦寺まで付き合っても良かったかなあ……」

「そうですね。僕が時刻を気にしたばかりに、あたら早春の良夜の宴が夢、幻と消えてしまいましたね。申し訳ありません」と謝ると、

「いやいや、それはあくまで仮定の話。気心知れた者同士で酌み交わす酒もまた善し」

ここでまた話題を転じた。

「ところでフランスにも、生で魚介類を食べる習慣はあるのですか」

「もちろん。魚は生で食べることはまずないと思うが、貝類はよく食べるね。特にカキの生、これはもう美味の一つです。今時分がちょうどシーズンだ」

「フランスのカキの味はいかがです」

「そりゃ、もうなんと言ったて、最高ですよ。僕は日本ではあまり生でカキは食べないんだが、フランスでは、それこそ生カキがベストだね。あちらではだいたい年中食べられるけれども、やはり寒い時期がうまい。カキも種類がいろいろあって、それを何種類か混ぜて注文するのがいい。例えば、ブロンだとかクレール、ポルチュゲ、それにハマグリにムール貝なども生で食べる」

「どれが最もおいしいですか、先生のお口には」

「僕はやっぱりブロンだな。これは貝が円盤状でね、身も円い。そして値段も最も高い。他のものの倍はするかもしれない。でも、あれ

が一番うまい」

「魚の料理で好きなのは？」

「そうだなあ、やっぱりヒラメのボンヌファンムかな」

「それは何ですか」

「溶かしたバターでヒラメを煮たもの」

「へー、それは初耳だ。で、他の料理で好きなフランス料理

は？」

「アニヨ、小羊の焼いたものだね。付き合わせはアンディーブ」

「小羊か、なるほど。僕のフランス料理の思い出は、南仏のアルルに泊まった時のことです。駅から町中までかなり離れていますよね、あそこは。コロッセウムの近くの安宿に荷物を置いて、夕方散歩がために界限をぶらついたのです。まずキャフェーに入って、ビールを呑んだんですよ。その時にカウンターのマスターに尋ねたのです。ゴッホの『アルルの跳ね橋』がどこにあるのかと聞いたんです。ところが僕のフランス語の発音が悪いせいか、通じないのです。そのうちに周りの客たちが僕の周りに集まって、何だ、何だと聞いてくるのですよ。言わばやじ馬ですよ。僕が何度か、「ル・ボン・ドウ・ピンセント・ファン・ゴッホ」と繰り返しても分かってもらえないので、紙に書いたのです。すると周りにいた男の一人が、「アー、ル・ボン・ドウ・ヴァンサン・ヴァン・ゴック」と言って、皆に二三付け加えながら説明したら、やじ馬連中が一斉に頭をふって、了解の笑みを浮かべたのです。カウンターのマスターが、それはここから遠いから、一

且駅に行って、タクシーを拾って行くといい、と丁寧に教えてくれました。それで僕が周りの連中に礼を言うと、皆にこにこしながら、それぞれ自分たちの席に戻ったのです。それから急に周りの雰囲気がなごやかになったように感じました」

「南仏の連中は陽気で親切だからね」

「僕は良い気分でビールを飲み、序でにこれから夕食したいけど、どこか良い店はないか尋ねたら、教えてくれたんです。その店はほんとうに良かった。安くて、美味しくて」

「何を食べたの」

「スープと肉です。でもその時に飲んだ赤ワインが忘れられません。素晴らしく美味しかった。人はワインを作り、ワインは人を作るという言葉を実感しました」

大村先生は黙ってうなづいた。こうして早春の一夜が瞬く間に更けて行った。

七 南紀美食紀行

四月初旬、春酩の日の午前十時に大和西大寺駅南口で待ち合わせ。参加者は大村、東山、田中、堤の四人。東山さんが紅一点で、浅黄のワンピースの上に黒褐色のミンクのコートを羽織っている。なかなかお洒落な出で立ちだ。一番年配の大村さんは白のズボンにクリーム色のジャンパーとラフな姿。堤は紺のコール天のズボンに紺のトックリセータと同じく紺のヤツケを着て、青のスニーカーという紺づくめの

格好。そして車の所有者で運転手兼任の田中さんはベージュ色のズボンとブレザーに茶色のタートルネックと一番若々しい服装だ。お互いに軽い挨拶を交わした後に、早速車に乗り込む。車は乗用車ホンダのトルネオ一八〇〇。助手席には運転交替要員として、大村先生。後部座席に東山さんと堤。

「いざ、出発！」と堤が剽軽な声で号令をかけると、他の同乗者が一斉に笑いだし、

「堤さんが一番ハッスルしてるわ」と東山さんが横目で冷やかしかし気味に言う。

「そりゃ、そうですよ。この旅行の言い出しっぺだもの、僕は。それに今度の旅行には大いに期待しているんですよ。おいしいものに色々出会えそうで」

「そうだといけれど、期待はずれに終わることだってあるわよ」と東山さん。

「かも知れませんがね。でもそれもまた善し。期待外れも経験、これまた一興。ともかく旅は道連れ世は情けの弥次喜多道中と参りましよう」と堤は極めて上機嫌の態である。

さて我らが車は、平城宮跡の西側の道を南に下り、阪奈道路を左に曲がり、大宮通りから奈良公園の交差点で右折し、天理街道を南下して、天理の少し手前で名阪高速道路に入る。一路亀山方面を目指して走行。車の流れは比較的スムーズである。速度は時速八十キロの安全運転を守る。針インターチェンジを通過する時に、

「この都祁村の学習交流センターで僕は講演をしなくちゃならな
いんだけど、ここまでは遠いなあ。自動車がない」と大村先生。

「僕ですよ。来月の中旬なのですが、まだ講演の原稿ができてな
い。読まなければならぬ資料が沢山あるのだけど、春休みも早終わ
り、また授業が始まるからなかなか読む暇がないのです」と堤がため
息をもらす。

「何について話すの」と右隣の東山さんが聞く。

「大伴家持についてです」

「家持？それはまたえらく畑違いのテーマなこと。どうしてまた家
持なの」

「こちらに引き越してきてから、万葉集を読む機会が増えましてね。
いつも枕元に万葉集を置いていて、夜中に眠れない時など、それを開
いて読むのです。万葉仮名の原文で読むのと、普通の読み下しで読む
のとは、随分イメージが違います。漢字だけの表記にも興味がわく。
そうやって読んでいるうちに、万葉歌人の中で最も好きなのが、家持
だと改めて気づいたものだから、そこるところをもうちょっと詳しく
勉強してみようかと思ひましてね。それで講演することにしたんで
すよ、実は」

「堤さんはレパトリーが広いなあ。専門以外に色んなことができ
るのだから」

「単なる好奇心ですよ。ただ和歌は昔から好きだし、下手の横好き
で、自分でも歌を作りますから。それにこうして奈良に住むのも、何

かのチャンスだと思ひますしね」

「青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり、か」と大
村先生。

「小野老の歌ですね。九州太宰府で奈良への望郷の念を詠んだもの
だそうですが」

「それで、堤さんは講演でどんなことを話すつもりなの」

「それはさっきも言った通り、まだはつきりしたことは……」

「でも、大凡の趣旨は決まっていますよ。それを少し聞かせてよ、
私にも」

「そうですね。それでは予行演習として、聞いていただきますか。
万葉集はいつ成立したか、それに誰が最終的に今日残っている形に編
集したか。これは実はいまだ確定していない問題です。色々な学説は
ありますが、まだ定説をみないのが現状です。僕の関心の一つは、そ
の何時、誰が編集したかにあります。ご存じの通り、万葉集は凡そ四
千五百首の歌が収録されています。その中の約四百八十首が大伴家持
の歌です。これは全体の一割強に当たり、万葉歌人の中で最多の収録
歌数です。そして万葉集第二十巻の最終の歌が家持のものです。ここ
から大伴家持が万葉集の編者の一人だったに違いないと推定されてい
ます。僕もそうだと信じます。ただ最終編者かどうかは疑問ですが。
それから個人的な体験ですが、僕の小学校の頃の国語の教科書に載っ
ていたのが、

うらうらに照れる春日に雲雀上がり心悲しも一人し思へば

がそれです。これが僕が最初に覚えた万葉集の歌です。僕は田舎育ちで、晩春のもの悲しさを詠んだこの歌にひどく共感したのを今でもよく覚えています。それから高校の頃に受験勉強で万葉集の名歌を初めてまとめて読んだ。その時に感動したのが、奇しくも家持の歌だったのです。例えば、次のような歌です。

春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ乙女

朝床に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつづ唱ふ船人

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも

わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

それで家持をいつかゆつくりと鑑賞してみようと思っていたのです。そう思いながら早くも四十年が過ぎてしまった。それが今度の講演の契機です。それでここ数カ月万葉集や家持の関連の資料や書物をできるだけ多く探し求めて読んでいるところです。そこから僕の家持像がほんやりとながら浮かんできた。家持は一体どんな人間だったのか。彼は一体どんな性格の持ち主だったのか。それを僕なりに考えて話してみようかと思うのです」

「それで家持はどんな人なの」と東山女史が突っ込む。

「まだ結論は出ていません。歴史家の中には、優柔不断で感傷的な

貴族官僚と手厳しい評価をする人もいますが、それは一方的な見方だと僕は思いますね。確かに彼にはそういう面もあります。色々な点から見て、彼は内面的に屈折したものを持っていた。非常に矛盾した気持ちの持ち主だったようです。それは彼の志によく現れている。丈夫と遊士、すなわち「ますらをぶり」と「みやびをぶり」、この二つが彼の意識下に絶えず潜在していたように見受けられる。ますらをととは、志の高潔にして堅固な男子であることであり、家持の場合それは天皇に近任して、伝統的な武門の誉れを維持し、さらにそれをより一層高揚する事だった。彼は常に熱烈な勤王の忠臣であろうとした。それは彼の多くの歌にはつきり表明されている。例えば、

大伴の名に負ふ鞆帯びて万代にたのみし心いづくかよせむ

ますらをの心思ほゆ大君のみことの幸を聞けば貴み

大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標立て人の知るべく

天皇の御代万代にかくしこそ見し明らめめ立つ年のはに

この彼の意志は生涯を通じて、半ば貫徹し、半ば挫折したかに思えます。さてそれでは「みやびを」としての彼の願望はどうであったか。それもやはり彼の歌に如実に現れています。雅はまずあらゆる美への愛として発現します。彼の場合は特に自然の風物への共感と賛美、そして同性への友情と異性への愛情に顕著に現れています。また大伴家持の功績は、上は天皇から貴族達、下は庶民から衣食までの真心の発

露を拾い集めて編集し、それを万葉集として今日まで残してくれたことだと思ふ。この偉大な功績、それに彼自身の詩歌の素晴らしさ、それを少しでも講演で伝えることができたなら、いいなあと思うのですが」

「何か聞いているだけで、面白そうね」と東山女史。後部座席の二人だけがおしゃべりするの気が引けるので、しばし沈黙を守ることにした。車は国道二十五号線を順調に進み、伊賀上野、柘植、中在家を通過した。

十一時過ぎに、車は亀山の手前の関インターチェンジで伊勢自動車道に入った。ここは高速道路だから有料である。多気まで時速百二十キロで飛ばし、そこから高速を降りて国道四十二号線を南下する。正午を過ぎたので、昼食をとろうと意見が一致。どこか道路沿いの料理店を物色する。滝原近くの和風レストランを見つけ、その店の駐車場に車を止めて、店に入る。カウンターの前に四人掛けのテーブル席が三つ並んでいて、奥の二つは既に客が陣取っている。仕方なく入口近くのテーブルに座る。右手奥にはかなり大きな座敷があり、そこも団体客がにぎやかに食事中である。我々はまず生ビールの中ジョッキを四つ。テールブル備え付きのお品書きを広げて料理をあれこれ品定めする。大村先生はステーキ定食、田中、東山の二人は茶そば膳、堤は盛そばと刺身盛合わせを注文した。昼にあまり沢山食べると、夕食が美味くなくなると危惧したからである。茶そば膳は茶そばに山菜ご飯、漬物、味噌汁がついている。若い女の子がビールを運んでくると、まづは乾杯。ビールは瞬く間に飲み干される。大村と堤の二人は早速お

代わりをするが、運転を担当する田中さんは断念。東山さんはあまり飲めないもので、すぐに食事に着手。料理はすべて平均的、可もなく不可もないという味。刺し身の盛合わせもありきたり。尤も道路沿いのレストランに美味しいものを期待するのがそもそも間違っている。かくしておよそ小半時そこで昼食をして、勘定を済ました。都合一万五百円。堤がまとめて払い、夜に宿で清算することにして、午後一時半、レストランを出た。

国道四十二号線を一路南下。紀伊長島を経て、尾鷲から国道三百一十号線に入り、左手に熊野灘を臨むリアス式海岸を蛇行しながら走る。こと凡そ一時間半。大泊から東口の駐車場に車をとめて、景勝「鬼ヶ城」見物を試みる。午後少し遅いせい、観光客はまばらである。土産物センターの前を通って、海岸の絶壁に設けられた遊歩道を歩く。うららかな春日で、濃紺の海と紺碧の空の熊野灘の海面は穏やかに風いで、水平線は遠く霞む空の彼方に消える。太平洋は恰も巨大な自然の水鏡のようだ。波おだやかな海面に所々岩礁が点在する。東口から西側の弁天祠までの凡そ一キロ余の断崖に千畳敷、犬戻り、猿戻り、蜂の巣窟、鬼の見張場、多岐丸という海賊が住んでいたという伝説の岩窟等が続くが、遊歩道は幅が狭く昇り降りがきついで、途中で引き返す。地震で隆起した大岸壁を海の波が長い年月をかけて侵食し、それが今日のような海食崖と洞窟群を造りだしたらしい。熊野市の観光名所の一つに数えられる。駐車場に面した土産物店中で中を見物。硯や若石、珊瑚や真珠の装飾品がずらりと並んでいる。紺の制服姿の従

業員の中年女性が一人手持ち無沙汰な風情で、売り場のレジに立って、買う気のない四人の客をぼんやり眺めている。早く店仕舞いをして家に帰りたいのであろう。

熊野市街を通り抜けて、花の窟神社近くで右折し、国道三百十一号線に入る。だんだん山中の道となる。車はほとんどみかけない。二十キロほど走ると大きな川にかかる鉄橋を渡る。その橋の袂に車を停めて、地図を見る。どうもこの川は北山川らしい。我々の目指す目的地はこの辺りに違いないが、周囲は山で人家は見当たらない。東山さんが携帯電話で目当ての民宿に電話する。すると我々はすぐ近くにいるらしいと知れた。鉄橋の手前の河畔の道を南に二百メートル下った所に、二階建ての家があった。その正面の軒下の壁に「大和屋」と横書の看板がかかっていた。店に入ると、中年の気のよさそうな婦人が応対に出た。その婦人は手伝いの人らしく、我々の要望を聞いてから、昨日、ここのおかみさんが火傷をして入院したので、宿泊は残念ながらできないが、夕食はできますとの返事。どこか付近に宿泊するところはないだろうかと尋ねると、少し首をかしげながら奥の方に引っ込み、調理場の主人を呼んでくる。出てきた白い割烹着姿の主人は四十歳前後の善良そうな顔をしていて、我々の質問に対して、

「近くに「湍流荘」という所がありますが、あそこは食事付きでないと素泊まりはできないと思いますから、湯の口温泉に電話してみてください。あそこなら泊まれると思います」

親切な主人は早速電話をして、我々のために宿の予約をしてくれた。

それから夕食は六時半過ぎ頃に始めることに決め、その十分前に主人が車で我々を迎えに来てくれることになった。それで納得し、我々はそこから南に凡そ一キロ半ほど離れた「湯本湯の口温泉」に行った。周囲を山に囲まれた狭い谷間に木造の温泉本館と小川を挟んで裏手に山荘一棟と六つのバンガローが建っている。ここは以前鉱山があったらしいが閉山、村起こしに坑口を掘削したところ、地下深くから温泉が湧き出て、かつての陸の孤島が今や観光地に一変したとか。正式の地名は、三重県南牟婁郡紀和町湯本。

本館の受付で手続きを済ませ鍵を貰って、裏手の山荘に登る。平屋建の山荘はかなり広く、遊戯室や会議室、洗濯場などが付設されている。幸い今夜は我々の他に宿泊客はいない様子だ。宿泊室のドアを開けると、十六畳と四畳の二間に洗面所、風呂、トイレが付いている。広い部屋の隅に持参の手荷物をおろし、早速浴衣と半纏に着替えて温泉に行く。時刻はまだ五時過ぎだが、山深い谷間なので辺りが既に暮れなずんで黄昏の趣である。備え付の下駄を突っかけ、手拭を片手にぶらぶらと坂道を降りる。時々木々の間から漏れ来る懐かしいウグイスの声。他には何の物音もない。温泉は屋内の大きな湯船が一つと外に大小の岩で囲った露天風呂がある。まず内湯で石鹸を使って体を洗う、それから露天風呂にゆっくり浸かる。目前に聳える黒い山影。その上を見上げれば、濃紺の天空に瞬く星辰。そしてどこからともなく響くウグイスの心地よい鳴き音。

「いいですね、この雰囲気は」と堤。

「全く、桃源郷の趣だね、これは」と大村先生が応じると、
「イヤー、これほど良い所とは思いませんでした」と田中さんが嘆
声を漏らす。

三人それぞれに感銘深げな面持ちで湯に浸って、森閑とした山峡の
夕間暮れを体で享受する。このくつろいだ気分はまさに旅の醍醐味で
はなからうか。

入浴後、山荘の部屋に戻り、畳の上に寝そべりながら、テレビの料
理番組を見る。眠気を催しかけたころ、田中さんが、それそろ下に降
りないといけない時刻ですよ、と声をかける。それで再び着替えをし
て、本館前に降りる。六時半に約束通り、大和屋の主人がライトバン
で迎えに来た。外はもうとつぷりと暮れて、文目も分からぬほど夜の
帳が落ちていく。

わずか五分ほどで店に着く。小上りの座敷の奥で家族連れの先客が
五、六人すでに食事中だ。我々は手前の応接台の周りに坐る。手伝い
の婦人が飲み物へと尋ねるので、とりあえずビールを四本注文。差し
向かいにグラスに注いで、先ずは乾杯。風呂上がりのビールの美味さ
はまた格別である。料理はキジのコース。

「料理とは食物の理（ことわり）を料（はか）るという意味だそう
ですが、そう言われてみれば、確かに含蓄のある言葉ですね」

「なるほどね、普段何げなく使っている言葉もよく考えれば、深い
意味がある訳だ」

「話は変わるけれど、太平洋戦争中、奈良公園の鹿の数が激減した

のを知ってる？」と東山さんが唐突な質問する。男三人は一瞬、互い
に顔を見合わせる。

「餌が無くなったとか？」

「世話をする人がいなくなったりで……」

「それも多分あるかも知れないわね。でもそれだけじゃないの。も
っと重大な、秘密の理由があるの」

「それは密猟だな、きっと」と大村先生。

「鹿を殺して、食べたの？」と田中さん。

「どうも、そうらしいわ。私も人から聞いたのだから、詳しくは知
らないけれど、それは事実のようね」

「それはあり得る話だな。たとえ春日大社の神鹿でも、非常時とな
れば、人間の餌にされたのだろう。しかも鹿は実際美味ですからね。
空腹の身には、大変な御馳走に見えるのは、何とも仕方がないやね」
と堤が妙な弁論論を持ち出す。

「同じように、猿沢池のフナやコイも、戦時中は随分減ったらしい
わ」

「それは、当然です。人間が飢えるか、魚が飢えるか。聞くまでも
ないでしょう」

「そりゃ、そうだ。食い物が無ければ、魚は人間の餌となって成仏
するのが義務です」

「観光の目玉より、先ずは食欲。食欲充ちて、礼節を知る。鹿もコ
イもフナも人の口腹を癒して、往生する、これぞ仏の慈悲。南無阿弥

陀仏、南無阿弥陀仏」と堤が、ここで剽軽な仕草で合掌する。そこで万座哄笑。

間もなくテーブルの上にコンロが運ばれ、その上に丸い鉄鍋がすえられた。やや大きめの皿にキジの胸肉の切り身が盛られて来た。厚さが五ミリ、幅が三、四センチ、長さが七、八センチ程の大きさの肉片が十数枚。キジの鉄板焼きだ。各自直箸で好みの焼き具合で食べる。美味い。少し塩味がついてあるので、そのまま食べてもよいし、またポン酢の醤油ダレに浸けてもいい。次がキジの湯びき。三番目がキジの湯びきとワケギのぬた和え。四番目がキジの肝煮、五番目が杉の皮に包んだ蒸し焼き、六番目がキジの股肉の空揚げにジャガ芋のキジの皮包みの添え物、七番目がキジ鍋、そして最後にキジのおじやで締め。これらの味を一つ一つ描写するのは筆者には至難の業である。ただ四人が料理が出てくる度に、すごい、すごいを連発しながら、賞味したことは付言しておかねばならない。料理が美味しければ、当然アルコールもすすむ。ビールの後は日本酒。それも熊野の地酒。ぬる爛酒二合入りの徳利を何本お代わりしたのか、はつきり覚えていない。とにかく料理を賞味し、酒を堪能し、談論風発して、最高の夜となったのは確かである。春宵一刻値千金と称すべきであろうか。こうして夜九時過ぎに、お開きとあいなつた。かなり酩酊気味の男ども三人と上機嫌の淑女一人を、大和屋の主人が再びライトバンに乗せて、温泉の玄関まで送ってくれた。

山荘の部屋に戻って、テーブルを囲んで、改めて感激を新たにした。

そこへ田中さんが持参の赤ワイン二本とウイスキー一本を荷物から取り出して、テーブルの上に並べたから堪らない。ワインはシラーズの九七年もの。ウイスキーはジャックダニエル。

「いやあ、すごい。ほんとうにすごい」と大村先生はいたく御機嫌の態。

早速テーブルの上にグラスを並べ、赤ワインから試飲する。つまみは、東山さん持参のチーズ三種。

「いやあ、うれしいね、食後のワインにチーズとは」と大村先生。

「葡萄酒の美酒、夜光の杯。飲まんと欲すれば、琵琶馬上に催す。人生意得れば、すべからく飲を尽くすべし。金樽をして空しく月に対せしむなかれ。乾杯！」と堤が音頭をとれば、他も一斉にグラスを合わせて、異口同音に乾杯の声を発し、直ちに紅紫の液体を口中に流し込む。

「春の一夜が、こんなにも楽しいものとは思ってもよらなかったわ」と東山さん。

「人生の歓楽、ここに極まれり」と田中さん。

かくして春の夜の悦楽の宴が深夜まで続いたのである。

喉の渇きに目覚めて、時計を見ると五時半近くだ。他の二人は布団の中で熟睡している様子。おもむろに起き上がり、洗面所に行く。小部屋に寝た筈の東山女史の姿が見えない。早朝の散歩にでもかけたのであろうか。小用を足し、洗面し、蛇口から直接水をがぶ飲みする。鏡をのぞくと、明らかに二日酔いの顔だ。頭も若干重い。ビール、酒、

ワイン、その上ウイスキーも飲んだらしい。一体どれだけ飲んだのかしら。はつきり覚えていない。でも楽しい酒だったことは確かだ。楽あれば苦ありは世の習い。宿酔の解消には、温泉が一番だと気づき、部屋に戻り洗面具を用意していると、大村先生も起きだして朝風呂に入ると言う。で二人連れ立って、下の温泉場に降りる。山間の早朝の空気の爽やかさはえも言えない。処々で鶯が爽やかに鳴く。

浴場には誰の姿もなく、我々が一番風呂。かかり湯を使ってから、すぐ露天風呂に入る。温泉水滑らかにして凝脂を洗ったのは、唐の楊貴妃だが、今朝の我々は老体の贅肉をふやけさせて、毛穴から余分なアルコールを発散させねばならぬ。しかるに十分も湯に浸かっていると、のぼせてきた。そこで屋内に入って、石鹸で体の隅々まで洗う。ついでに洗髪をし、髭を剃る。それから水を浴びて、再び露天風呂に入る。眼前の山の樹木も新緑の色合い。尾根の稜線で切られた天空は薄墨色から澄み切った紺青色に変わっている。しかし太陽はまだどこにも姿を見せない。東がどちらの方向かもとんと見当がつかぬ。まあそのうちにどこからか朝日がのつと顔を出すだろう。

かれこれ一時間近く温泉に入ったり出たりを繰り返した後、ようやく気分が大分回復した。脱衣場でしばし休憩して、着替えを済ませてから本館前の広場に出ると、東山女史が浴衣半纏姿で垣根の傍らのベンチに坐っていた。男性二人を笑顔で出迎え、爽やかな朝の挨拶を交わした。それからそばの桜の若木を指さして、

「さつきね、私がこの桜の花をじつと見つめていたの。そしたら一

つの蕾が突如ぱつと花開いたのよ。まるで私に微笑みかけるかのよう。感激したわ。花も人の気持ちに分かるのかしら」

ベンチの横の一本の山桜はまだ五分咲き状態で、四方に伸びた小枝の処々にまだ蕾や半開きの状態の花が幾つか見られた。南紀の春は今まさにたけなわだったが、ここ紀和町の山中は朝夕の冷え込みが厳しくて、桜の開花も平地より遅れているのであろう。堤も桜の木の前に行んで、蕾の一つを真剣な眼差しで見つめていたが、とんと開花する気配がない。彼は大きな溜め息を漏らして、

「どうも普段の心掛けが悪いせいか、僕の気持ちが桜には通じないみたいだ」

すると、東山さんが急に笑いだして、

「そりゃ、にわか仕込みの片思いではねえ。やっぱりそれなりの修行が必要でしょ、桜と相思相愛の仲になるのには」

山小屋の部屋に戻ると、田中さんが眠そうな眼をこすりながら、布団から起き出してきた。彼も温泉に入っていると、浴衣着に半纏を引っかけて部屋を出た。残る男女三人は休憩がてら応接台の周りに坐ったり、横になったりして朝のテレビ番組を見た。九時前に寝具を片付け、荷物をまとめて、車で小川口の大和屋に寄った。座敷の卓上にはすでに朝食の用意が整っていた。雉の釜飯に味噌汁と漬物。釜の蓋を取った時のこうばしい香り。香りばかりか、そのご飯の美味しさ。とても言葉では言い表せない。食べ物の美味は各人の五感を通じて全身で実感するしかない。しみじみとそう思う。それにしても、雉料理が

これほど種類が多く美味なものだとはつゆ知らなかった。はるばる来た甲斐があった。料金は四人分飲み代を含めて、都合二万六千四百円なり。その料理の内容はもとより主人の送り迎えの親切さ、お手伝いさんの歓待ぶりを考えれば、何と安い価格であろうか。ただ一つの欠点は、この店が我々の住む町から余りにも離れ過ぎていて、そう度々は来れないことである。それがかえすがえす残念である。しかし逆に考えれば、この店はこのひなびた紀和町にあればこそ、その良さがあるのだ。都会ではその長所がすべて瞬く間に失われてしまっただろう。

十時前、店の人達に見送られて、名残惜しくも出発。瀨大橋を渡り、国道三百一十一号線を南西に走り、十津川村の竹筒で三差路を右折し、国道百六十九号線を北上する。蟻越峠を越えて、北山川畔の玉置口に下る。森林浴エリア「瀨の郷」の駐車場に駐車。この一帯は奈良、和歌山、三重の三県の県境だが、正式には和歌山県熊野川町の属する。しばらく時間待ちをして、近くの簡易乗船場で木造の船に乗り込む。定員八人だが、乗客は我々四人だけ。底の浅い五平太船。船縁に渡した板の上に二人ずつ坐す。船頭さんは七十がらみのおじいさん。昔は筏流しもやったそう。菅笠を被り、日焼けした逞しい腕に竹竿を握り、河原の岸を離れ、浅瀬から川中まで水中に棹さして進み、船尾のエンジンをかけて、爐に坐り、舵を操りながら徐に上流に向かう。全長百六十余キロの熊野川の支流の一つ、北山川。その上流の溪谷が瀨峡。川幅はせいぜい五十メートル程か。左右は絶壁断崖。その上に原始林の生い茂る山が聳え立つ。淵は深い所で十メートルとか。碧玉色

の満々たる水。両側の断崖絶壁が侵食されてできた奇岩怪石、その所々に赤いツツジの花が咲いていて、木々の緑に映えて美しい。見上げれば、ややかすみを帯びた青空が峡谷の狭間にのぞく。船頭さんは船の速度を調節しながら、見所を説明する。獅子岩、天狗岩、天柱岩、屏風岩などなど。四人の騒客は時に黙って頷き、時に嘆息を發しながら景観に見とれる。途中で猛スピードのジェット遊覧船とすれ違ふ。その時余波で我々の木造船は左右に揺れる。玉置口から田戸まで瀨八丁を往復するのに凡そ四十分。素晴らしい峡谷美を堪能した。それにはなにより昔ながらの木造船と素朴な好々爺の船頭さんの貢献が大き。真の観光はすべからず手作りでなければならぬ、そう痛感した。

下船して、土産物店で鮎の干物、割り箸、草鞋一足を家苞に買う。時は既に正午を廻っている。早々に車で元来た道を引き返す。北山川が熊野川に合流する地点から国道百六十八号線となる。それを一路南下。新宮で国道四十二号線に出て、海岸沿いに勝浦に向かう。那智勝浦で昼食をとることに衆議一決。

寿司屋の名は「八雲」。気つ風のいい亭主夫婦とその若い息子夫婦とでやっている。去年もここで会食をして、気に入った店である。先ず生ビールで乾杯。それから各自お好みで握り鮎を注文する。トロ、アワビ、ウニ、鳥貝、赤貝、ヒラメ、畝須(鯨の胸肉)、その間に生ビールのお代わり。食べながら談笑することしきり。ところが宿酔とビールとで陶然として、筆者は会話をメモすることをすっかり失念してしまった。その会話をここで再現できないのが残念である。

少々高すぎる代金を支払って、店を出たのは昼下がりの二時近い時刻であった。車に乗って、西に走る。途中、串本に寄り休憩して、一路、白浜へと向かった。今宵はいずれの宿に泊まり、いかなる美食に出会うのであろうか。

Tourism and excellent Cuisines

Kyohichi OHMURA and Hiromi TSUTSUMI

